

■一月十二日■  
七時。朝焼け。雲なし。昨日の夜に『白鯨』（幾野宏訳、『集英社ギヤラリ』『世界の文学』『アメリカ1』所収、一九九一年）を読みはじめた。「はたして、この世に奴隷でない人間がいるものかどうか、ひとつそいつを聞かせてもらいたいものだ。いないとすれば、おいぼれ船長がどんなにわたしをこき使おうと——どんなに小突きまわそうと、これでもいいんだということがわかって、わたしは満足だ。ほかのみんなも、あれかこれかの面で同じような目にあっている——つまり肉体的な面にせよ精神的な面にせよ、ということだが。そんな次第で、げんこつは世界じゅうにちゃんと行きわたるのだから、みんな互いに抱きあつて満足すべきだ」（31）

■一月十七日■  
洗濯物を干して、仮眠から目覚めた午後早く、晴れになっていた。うれし。植物たちに水をやる。いつもよりよく翻訳直しに取り組める。晴れただけなのに……。

■一月十八日■  
訳しているところを電話口でAに聴いてもらう。話のなかのある事実を知ったときのAの「ええーっ！」というリアクションが新鮮で、小説自体が息を吹き返したかのようにだった。焦っているけれど、少しずつでもよくなっているし進んでいると思いたい。思おう。進んでいる。よくなっている。進めよう。思おう。知り合いの家のウサギが、先日送ったCDの紙のケースを検品している画像が送られてくる。かじつていて、まったくかわいい。夜二十一時半、コンビニまで散歩。

■一月二十日■  
白鯨。十六章「船」ビークオド号登場。船のパーツの要所要所に鯨の骨を使っている欄々しいしろものである。船の要人にみずからを売り込むイシユメイル。しかし最初に話しかけたビークオド号の船主のひとり、ビイレグ船長は簡単には彼を採用しない。「（…）おぬしが言葉通り本当に鯨捕りのことを知りたいのなら、足を入れてしもうてひっこみがかんようになる前に、どんなものかわかせて進ぜよう。それにはエイハブ船長をひと目みることだ、お若いの」（90）まだ海には出られなそうだ……。

\*

食事中の話の流れで「寝言はいう？」と同棲している友人ふたりに尋ねたら、彼が言うらしい。あるとき「ウワァー！」とすごい声で起き上がって、「上と下がひっくり返ってる！」と言い、彼女もまあまあ寝ぼけているのでスマホのフラッシュライトであたりを探した。「なににもないよ」と言っても、彼は「ちゃんと見てきて！」と叫ぶばかりだった……：うろたえる彼女を残して叫ぶだけ叫んだ彼はすやつと眠った。

■一月二十四日■  
夕方から雲行きが怪しくなってきた、雪は降っていないが窓が揺れるほどの強風。ペランダの飛びそうなものとアガベとサボテンをなかに入れる。

■一月二十五日■  
朝九時過ぎ。かなり寒い。まさに自分と外のあいだに布団一枚しかない。「本当に暖かさを楽しむためには、どこか寒いところが少しはなければならぬ」とイシユメイルは言っている。「この種の甘美な快適さの極致を味わうには、自分自身および自分のぬくもりと、外気の寒さと

のあいだに、毛布一枚以外に何も置かないことだ。そうすれば、北極の氷のまつただなかに燃える熱い火花のように横たわっていることができる」（75）。

■一月二十六日■  
七時に起きる。朝はドーナツ。正午前に翻訳一章分を送る。このままてきばききたい。

■一月二十九日■  
晴れ。テレヴィジョンのトム・ヴァーレーン逝去の報。日記冊子制作するが、保存し忘れて全部消える。午後、翻訳直し。二十一時過ぎに買物兼散歩。

■一月三十一日■  
八時半。晴れ。横に長い雲あり。

# 一月

■一月一日■  
友人KからLINEあり、昼ごろから近所の神社で初詣に行くから、だれかがYさんの耳からピアスがなくなっていることに気づいた。下を見ながら参道を並んでいたら、引いたら三人の「失物」にはことごとく「見つからない」というようなことが書いてあり、ただ自分の引いたものだけが「出る 物の間にあり」とあったが彼らというしよにいるあいだにはついに見つからなかった。快晴で、マフラーのいらぬ暖かい日だった。

■一月三日■  
夢。ルアイン・タマヨというものがすごく小柄な曾祖母があらわれる。タマヨはメキシコからきた。ぼくはひ孫として、画家であるタマヨの画業についてインタビューするか、彼女の仕事についてのかなにかをまとめて探すが、肝心の彼女のキャリアをあらわした年表が見つからない。

Diarists 2023  
[January]



川野太郎

# 1

■一月五日■  
最後に会ったときの印象よりはるかに調子がよさそう。Tと電話。最後に会ったときの印象よりはるかに調子がよさそう。去年の三月に会ったとき、「お食いものが美味くなった」と喜びを爆発させてしまった。その言葉を聞いて思い出したのだが、彼の体調の悪さと食べへの無関心は、自分のなかで近い場所にあったのだ。自分について、歳をとって単調になつて時の流れが速くなつたとかとも言えない、と彼は言い、でも同世代でそんなこと言っている人は初めてだと言った。

■一月八日■  
Frydoy Tsige Mengeshaのセルフトラブルアルバムを聴いた。とてもいい。ピアノのなかに惹かれるかといえ、こんな音がするからだとそこに時間が入っている。

■一月十日■  
八時前。快晴。激しくはない心の乱れ。